

IV ピアノ ソナタ 端山貢明

第1楽章 休みなく続く16分音符の起伏が事実上音楽を形造る。極端な音量の変化と増減する音群の波にのる長さの不定な二小節を単位とする断片。

調的でない音の指向性を求めるために音素材を単純化し、特殊な旋法を用いた事により耳の受けの一種の硬さ。

ほぼ中央の連続する和音の部分にも書かれた和音群の背後にある書かれていない16分音符の動き。

第2楽章 繰り返される簡単な音形を軸に三声の対位法。いくつかの旋法をさわる事によりこの音形の持つ一種のミスチオン。

第3楽章 第1、第2楽章と同じ方法を同じ素材の異つた局面に旋す。

曲全体は他の曲と同じに幾つかの要素を備えた一つの単位を自発的に変容させる方法によつて居るが、この曲の場合それが完全に厳格に行われて居る訳ではない。即ちこの曲をこの曲であらしめたファンタジーが他の要素の介入を許した訳なのだが、こゝではそれがよい効果をもたらしていると思う。私としては大変愛しているこの曲が今度ピアノを通じて音楽の深さを色々お教え下さった恩師である安川先生により演奏されることはこの上ない喜びである。

(解説 端山貢明)

(「安川加寿子ピアノ独奏会」冊子 1962/11/26 掲載)